

令和7(2025)年度 宇部市芸術祭

感動と癒しの出会い ～文化を次世代に～

「うべ市民文芸集」

〈第10号〉



主催：宇部文化連盟 宇部市文化創造財団
共催：宇部市

UBE 宇部市
未来を彫刻するまち

「宇部市芸術祭文芸部門作品集『うべ市民文芸集』第10号が発行されますことに、心からお祝いとお喜びを申し上げます。

本年も数多くの心のこもった素晴らしい作品をお寄せいただき、日々の文化活動へのひたむきな情熱が美しく結実したことに敬意を表します。

文芸は、人の思いや情景、無限の想像力を言葉で紡ぎ出す芸術です。

この文芸集を通じて、文芸の魅力や日本語の美しい響きを感じていただき、一人でも多くの方に、表現することの楽しさを味わっていただけることを願っております。

また、今回の題材のひとつでもある「宇部市内の風景や建造物等」にちなんだ作品を通じて、心に浮かぶふるさと宇部の情景を、皆様それぞれの思い出に重ねていただき、共感や新たな気づきなどとともに、本市の魅力を改めて見つけるきっかけとなれば幸いです。

文化活動を通して享受する楽しさや感動は、日々の生活に潤いをもたらし、生活を心豊かにします。本文芸集が世代や立場を超えた新たな交流を生み、本市の文化活動がますます活発なものになることを期待しております。

なお、本市では、文化振興ビジョン（第三次）に基づき、「人と地域がきらめく 文化の薫るまち」を基本目標に、未来を担う子どもたちをはじめとしたすべての世代の市民が、文化に触れる機会や文化活動を行う機会の創出に、積極的に取り組んでおります。

これからも、市民の皆様には、芸術祭をはじめ、芸術家の作品鑑賞や舞台公演など、さまざまな芸術文化に親しんでいただくとともに、今年名称を変更し新たなスタートを切る「UBE現代日本彫刻展」など、本市ならではの芸術を心ゆくまで楽しんでいただくことを願っております。

結びに、文芸集の発行にあたり、多大なるご尽力を賜りました関係各位、作品をお寄せくださいました皆様から感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

令和七年度 宇部市芸術祭 「うべ市民文芸集」 目次

俳句 1

短歌 21

詩 33

表紙 宇部市美術展覧会 宇部市長賞
「遠い記憶」 管 克己

俳句

選者詠

はらからも父母送りしも月のころ

兼久 ちわき

麦笛の元気な子等の音元気

永田 芳子

繼子の尻ぬぐひよちよいと觸れて見な

西川 章夫

柩出て草の穂絮がゆるくなる

堀 節 誉

令和七年度 宇部市芸術祭 俳句部門 入賞作品

〔一般の部〕

宇部市長賞

靴底に貼りつく地球油照り

平川 扶久美

宇部市教育長賞

一面に切手貼り付け新米来

梅木 知也

宇部市議会議長賞

糸蜻蛉瞬き程の風にのり

和田 喜子

宇部文化連盟賞

秋燕磯の奇岩を掠めゆく

川上 由里子

宇部日報社賞

靴揃へ男の子ら上がる籬の家

金子 満里子

入選

切株へ風と座われれば五月来る

保田 尚子

春宵や留守居の猫の大欠伸

田中 福江

菓子箱が裁縫箱や夜なべの灯

萬 洋子

夕焼や最終バスのドアの音

片山 いつ子

生きてますとひと言友へ年賀状

浜村 洋一

夾竹桃こんなに赤いと躁になる

田中 和子

すぐ覚えしことばセンチと入園児

西田 久美江

ほろ苦し秋刀魚のわたと片思ひ

池田 けいこ

母へ淹るるシナモンティーや冬うらら

西村 千江

七五三今なき店の畳紙出し

河村 千代子

「学生の部」

入選

風鈴が僕が私が主張する

ほたるたち夜道をてらすみちしるべ

指先の指すその先に流れ星

伊藤志玲奈

野海和修

片岡小椋

「席題の部」

戸(詠み込み)

手袋

優秀賞

三姉妹そろいのミトンでハイタッチ

祖母と挽ぐ背戸の熟柿の遠き味

見当たらず妻の手袋借る散歩

白波や冬日差し込む大玻璃戸

ゆびきりの小指をそつと手袋に

尾崎慶子

和田喜子

梅木知也

平川扶久美

熊本綵乃

【一般の部】

目迎への目印としてサングラス	椿	壽子	賑かに一期一会の遊び船	真木風雪
全員の着席待ちぬ夏料理	椿	壽子	鳴き声の移り変わりし蟬時雨	小野裕代
物価高家庭菜園五月晴れ	畑	中和子	夕映えに追いかけてごっこ赤とんぼ	小野裕代
「ごうじょ」とひな菓子配るひ孫の手	畑	中和子	空仰ぎ崩るる牡丹のその紅き	村田淑子
切株へ風と座われれば五月来る	保田	尚子	伊達締め肋骨固定年明くる	村田淑子
トンネルを抜けて新樹の新世界	保田	尚子	天空に泣き顔うつす終戦日	石田勝子
帆の彫刻素直に風を受けて夏	正司	道子	稲の花そつと手にする朝かな	石田勝子
彫刻の列車からつば鳥帰る	正司	道子	ひぐらしや働き詰めの夫のこと	大森郁子
献花台へ哭かぬ空蟬ならべをり	榎田	敦子	逝きし夫の「五木全集」曝しけり	大森郁子
笑い声聞いてはひらく花白蓮	榎田	敦子	新涼の手品のごとく来たりけり	萬洋子
顔を出す富士の見つめる茶摘みかな	松木	宏	菓子箱が裁縫箱や夜なべの灯	萬洋子
湯豆腐や遺言のような顔を見せ	松木	宏	紅差して笑顔こぼしつ盆踊り	岡村君江
しゑすたと小春日和に決め込んで	伊藤	聡	孫去んで壁に落書夏終る	岡村君江
サヨナラの凧風いで日溜まりて	伊藤	聡	向日葵を心に咲かせ昂揚し	熊本綵乃
春宵や留守居の猫の大欠伸	田中	福江	白百合の開ききらずに友の逝く	熊本綵乃
ひとときの縁にても善し孕み猫	田中	福江	妣迎ふ岐阜提灯の絵を点し	爲近正子
蜥蜴鳴く悪のはびこる世の中に	真木	風雪	群青の山は打敷入道雲	爲近正子
			海面に廢坑の跡夏の空	伊藤文策

盆過ぎてまだこの暑さこの野郎	伊藤 文策	梅雨曇赤き一輪目に止まり	貞永 厚子
水彩のちよつと太めに描く秋刀魚	常見 雅男	宮鳩や重九の空を翔けめぐる	片山 いつ子
大の里級なる雨後の胡瓜かな	常見 雅男	夕焼や最終バスのドアの音	片山 いつ子
去る早春を惜しみ光陰辞世かな	藤田 甲二	夏来たる翡翠葛やこぼれ散る	河村 よし子
合掌や灯火かざして幾山河	藤田 甲二	口笛に鴨群なして泳ぎ寄り	河村 よし子
洗濯機少し軋しみて葉月尽	上田 久美枝	糸蜻蛉隣さ程の風にのり	和田 喜子
日焼けの子今日はピアノの発表会	上田 久美枝	遺骨収拾むかふダイバー冬の海	和田 喜子
身の丈に伸びし花壇の百日草	今村 美智子	手を繋ぎ夫と朝の大花野	松本 千代子
いちご会、ビールフェスタで笑顔見る	今村 美智子	江戸末期に建ちたる鳥居秋の宮	松本 千代子
AIの世に放られて虫を聞く	小林 めぐみ	蟻ごろし撒きて巣穴に手を合わす	松下 孝子
朝の気の藍を絞りて牽牛花	小林 めぐみ	獲物待つ窓のやもりへ今晚は	松下 孝子
抱きやすき人のかたちよ秋風よ	中塚 紀代子	小春日や芝刈ロボット音軽き	藤岡 由紀子
百日紅彼女きれいな笑い皺	中塚 紀代子	露の臺戦火跡地にのぞきをり	藤岡 由紀子
心地よく網戸の風の通り抜け	今井 美代子	どうぞ御無事で杖の音行く夏の朝	木村 幸子
剪定の鋏の音にリズムあり	今井 美代子	液状化し沈む吾の家冬の雨	木村 幸子
車窓映え淡き緑の花みづき	宮崎 修五	黒南風や関門橋の潮うねり	黒木 久子
水不足耐へて稲穂の実りかな	宮崎 修五	農事日誌紐ほどきより春耕す	黒木 久子
零れ落つる雨粒も紫陽花の色	貞永 厚子	空襲の話聞き入るソーダ水	平川 扶久美

靴底に貼りつく地球油照り	平川 扶久美	秋燕磯の奇岩を掠めゆく	川上 由里子
濡れ縁にまどろむ早乙女泥落し	前田 澄江	生きてますとひと言友へ年賀状	浜村 洋一
逃げ水や常盤通りの新庁舎	前田 澄江	うつすらと葉先に紅の若楓	浜村 洋一
仕舞ひ置きし塗りの中皿新豆腐	牛尾 美美子	ノスタルジー出会ひし歌に秋の雨	磯部 淑子
零余子飯菜の吸物に母の笑む	牛尾 美美子	気紛れにかなぶんに告ぐ擬死無用	磯部 淑子
氏神も氏子も古りし散松葉	山崎 喜代子	朝焼けの空に飛び立つ始発便	伊藤 麻衣
見えぬ風見せる白帆や秋深し	山崎 喜代子	満月に工場映える湾岸線	伊藤 麻衣
一面に切手貼り付け新米来	梅木 知也	山笑ふ仏の耳の大きなり	富永 玲子
道普請コスモスよけて刈にけり	梅木 知也	秋うらら引き売りの声つととまる	富永 玲子
夢うつつ猿酒愛でる常盤かな	綿谷 正文	カヌー漕ぐ水脈のひろがり暮の秋	辻岡 伸子
百彩が水面をゆらす菖蒲苑	綿谷 正文	置ざりのパンク自転車草の花	辻岡 伸子
鶴亀の欄間へ寿の若葉光	村田 邦子	秋風にウガンダで酌む黒香	酒井 隆夫
神鶏の啄みてゐる土俵かな	村田 邦子	夏の夜響く天井抱く館	酒井 隆夫
スパイクの手入れする背やちろる鳴く	村中 友江	ふるさとは慈雨の中なり橋渡る	厚母 至眞子
出雲路や旅のはじめの走り蕎麦	村中 友江	夏盛ん平和を祈る人数多	厚母 至眞子
過疎団地空き家から蛇見送りぬ	宮本 陽子	靴揃へ男の子ら上がる雛の家	金子 満里子
茹だる夏ドジャーズ勝ちて家事勢む	宮本 陽子	ほのぼのと灯る茶店や蔦の秋	金子 満里子
千本ノック浴びたる子らや大夕焼	川上 由里子	星月夜外輪山を額縁に	縄田 悦子

炎天や湯の中潜り行くごとし	繩田悦子	錦秋や宿の窓より鳥の声	藤井貴宏
夾竹桃こんなに赤いと躁になる	田中和子	朝風の映える向日葵癒しかな	中川美津枝
青鷺にアンと命名呼びかける	田中和子	茶畑に香る豊かな天の風	中川美津枝
自慢げに猫銜えくる守宮かな	水嶋尚美	幼子の洗い髪すすぐ夏の夜	篠原裕美子
青紫蘇のジューズ色よく仕上がり	水嶋尚美	水遊び輝き届く我が子の声	篠原裕美子
組み始むる土俵の子らへ緑さす	宮本博子	蝉ノ声青少年会館跡	三明十種
雨の日の予定なき日や林檎むく	宮本博子	真締川底からゆだる極暑かな	三明十種
八十年平和守りし桜かな	高藤信子	茄子の葉に雨だれうがち穴だらけ	土山幸恵
人情味あふれてゐたり昭和の日	高藤信子	道路這うかたつむり手に葉の上へ	土山幸恵
玄関に注意書あり燕の巢	松井光世	兄弟の日課は喧嘩夏休み	花咲眞子
指染めて桑の実どっさり食べ放題	松井光世	一粒づつ小さき手口ヘデラウエア	花咲眞子
車イスさんまを焼いて半分こ	末繁紘子	大火花笑顔満開来年は	中川敏雄
秋風をまねき入れる敬老日	末繁紘子	朝夕に赤とんぼ飛ぶ涼しさや	中川敏雄
採石のダンブ炎暑の山下る	中尾史子	炎天や岩瀬を駆くる水の音	辻きみ子
恙無し変はらぬ主の稲架の技	中尾史子	雨宿りのつもり葉かげの子蟻螂	辻きみ子
お湯張りの設定2度上げ彼岸花	川野カツ子	爆心地素知らぬ顔の黄水仙	藤本幸一郎
干拓田のうねりやまずや土用入	川野カツ子	掌に包む螢を小さき手のひらへ	藤本幸一郎
向日葵や悔のいつしか消えてゆき	藤井貴宏	鯛雲岬に眺めてひとり酒	池田百合雄

小春風入れんと窓を開け放つ	池田百合雄	七五三今なき店の畳紙出し	河村千代子
栗拾い鬼皮剥きや夜の静寂	兼安隆子	大柄の父には茄子の迎牛	河村千代子
茶の花や母の揉み茶の香やさし	兼安隆子	半世紀ぶりの万博夏の雲	久保真珠美
始まりも終りも見えず蜷の道	垣内由衣子	麗かや記念樹沿いの遊歩道	久保真珠美
急登の果ての巖や滝しぶき	垣内由衣子		
玉垣を越え参道へ飛花落花	西田久美江		
すぐ覚えしことばセンチと入園児	西田久美江		
ほろ苦し秋刀魚のわたと片思ひ	池田けいこ		
焼き栗を街にて買へばボンジュール	池田けいこ		
愛猫の寝息揺蕩ふ秋の風	村田萌夏		
ジリジリと螻螂鎌に蝉みつけ	磯部芳弘		
変な泣き螻螂鎌に救う蝉	磯部芳弘		
寂しさと色づく柿の深さかな	磯部光隆		
天仰ぎ流れ来るのは罽雲	磯部光隆		
献立表に探すカレーや南風	久行雅子		
西日差す選挙ポスターみな笑顔	久行雅子		
鶴亀を謳ふ卒寿や春の宵	西村千江		
母へ淹るるシナモンティーや冬うらら	西村千江		

「席題の部」 戸(詠み込み) 手袋

手袋分く片手は君のポケットに	西村紀子	手袋で汗拭きつつ草を取る	平川和子
枯木や戸主欄へ名を新たに記す	河村千代子	孫へ編みしうさぎ模様の手袋を	藤岡由紀子
エレベーターの戸ふれば枯葉も乗る	萬洋子	三姉妹そろいのミトンでハイタツチ	尾崎慶子
手袋にビニルを結び出る童	西田久美江		
手袋をぬく手握るや老夫婦	宮崎修五		
手袋のかたわけ落ちし川流れ	三明十種		
手袋や網み目そろいし糸の色	兼安隆子		
ゆびきりの小指をそつと手袋に	熊本綵乃		
亡き母が編みし手袋恋ごころ	田中和子		
戸を引きて朝光あびつつ手袋握る	酒井隆夫		
白波や冬日差し込む大玻璃戸	平川扶久美		
退屈な犬に嗅がれて皮手袋	中塚紀代子		
独り居や戸締り再度冬の月	縄田悦子		
手袋の赤き乙女よ自転車よ	厚母至眞子		
見当たらず妻の手袋借る散歩	梅木知也		
祖母と挽ぐ背戸の熟柿の遠き味	和田喜子		
我が身にも地球の様も手袋か	藤田甲二		

【学生の部】

合格の知らせに青空ガッツポーズ

伊藤 志玲奈

風鈴が僕が私が主張する

伊藤 志玲奈

ほたるたち夜道をてらすみちしるべ

野海 和修

むしろたちが木に集まってお楽しみ会

野海 和修

二かいでかくれんぼうきわ三つでかくれるママ

篠原 灯里

くつこうこうえんチャリで行ったらかえりつらい

篠原 灯里

ちようちんの灯りにひかれ夏祭り

土山 葵

浴衣着てかき氷手に食べ歩き

土山 葵

みぎひだり風にゆらゆらねこじゃらし

片岡 小椋

指先の指すその先に流れ星

片岡 小椋

夏の夕雨が降ったな夕立だ

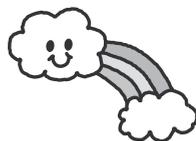
野村 直令

あつい夏風がふいても熱風だ

野村 直令



子ども文化夢教室



2025年度子ども文化夢教室において、小学生に楽しく俳句を学んでもらいました。子ども達は、自分たちの想いを素直に十七音の言葉に込めていました。

常盤小学校の様子



見初小学校の様子



常盤小学校 4年1組

ヒュルヒュルドカンとひらく大花火 安部 歩
 サツマイモほっかほかであたたかい 荒川 陽斗
 家の前1人でつくるゆきだるま 石井 佳純
 夏休みプールをして気持ちいい 上田 晶
 しずかだなたくさん虫がいない 小川 大馳
 学校の広い花だんにひょうたん 金子 晃士
 もみじがねかせにふかれてひらひらと 金子 奈央
 ひらひらとさくらの花がまい落ちる 北村 颯太
 どんぐりをもらいましたよありがとう 工藤 陸
 カマキリがかわのいわばにたまごうんだ 藏本 湊太
 時はいま梨を食べれる気分かな 佐村 理人
 満月だうさが住んでる夢の国 末廣 賢人
 さんまはねほねがいつぱいおいしいな 田坂 春翔
 イガイガのくりがたくさんいたそうだ 中野 世絆
 晴れた日に家ぞくみんなであつい海 秦 海晴
 イガぐりのイガがささったいたかった 花田 陸斗
 イチヨウの葉黄いろくなって落ちていく 福本 彰人

もみじの葉今だけみれるきちょうだよ 藤岡 悠
 イチヨウの葉きいろになって夕日さす 正木 滯
 やきいもが白いけむりでほっかほかだ 松岡 楓
 もみじの葉ひらひらおちて地が赤い 溝邊 愛夕
 イチヨウの葉ひらひらおちてじゅうたん 森重 翔太
 1人見る優しくゆれる菜の花を 山下 愛琉
 まっ黄色ちらかっているイチヨウの葉 吉田 知輝
 あまいあじかきがみのったこいオレンジ 渡部 依愛

常盤小学校 4年2組

やいたあとおいしく食べたさつまいも 青山 權
 季節にみのるきれいな葉っぱかきの山 伊藤 湊太
 5さいなりおいしいあじのちとせあめ 大田 朔空
 あつい夏公式戦でホームラン 梶矢 航輝
 学校でもみじを見たよきれいだな 河村 莉々愛
 さんまみたおいしいさんまとびはねた 喜多 晴大
 やきたてのさつまいも食べてあつかった 木戸 瑛翔
 うきぶくろうみでプカプカつめたいな 木村 弥琴

おち葉まうひらひらおちてきれいだな

常盤小学校 4年3組

初もうで神社に行つてねがいごと

夏休み宿題やらずゲームする

スイカわりまつくらこわいあつわれた

おしよがつおもちをたべてまんぷくだ

がっこうでもみじがみえてきれいだな

いちめんがまつしろさむいぎんせかい

あかいろのおおきなもみじきれいだな

あるいたらゆきがパラパラふつてきた

かがやくねさくらの花のおちるところ

ゆきだまでだるまになげてあそんだよ

こうようのイチヨウみながらめがひかる

ひらひらと真つ赤なもみじ真つ赤だな

さつまいもほかほかあついいいいな

ひらひらと真つ赤なもみじが落ちて来る

まんかいなイチヨウがきいろすてきだな

さむい日にさんぽをすればあたたかい

公園にかきがいつぱい食べたいな

グランドのゆきをつかんで手がまつか

雨の外で遊んでかぜひいた

おまつりにたべものもあつていい気ぶん

宇部祭りたこやき食べておいしいな

ギユッギユッとみんなでつくるゆきだるま

げん関に姉と作った雪だるま

登校中つめたい風が気もちよい

黄色の葉見るだけでいいイチヨウの木

ぼうをふりばかつとわれるよおおすいか

たけのこはぐんぐんのびてたけになる

もすがなくつらいきせつのはじまりだ

たのしいなイチヨウがきいろきれいだな

ゆきだまをなげてあそんだおとうと

さむいひはイルミネーションきれいだな

お正月お年玉もらつて面白い物だ

あかいろのりつぱなりんごおいしいな

ヒラヒラともみじたくさんおちてくる

小西 莉菜

小林 美羽

佐伯 このみ

清水 未莉

田中 梓

辻 晃希

橋本 湊ノ介

古河 千結香

藤岡 良太

藤田 雄仁

盆子原 なつな

宮木 優希

宮本 蒼大

村上 晴哉

山中 裕翔

山根 颯斗

横山 文ノ

脇田 かのん

青山 日和

芦田 楓馬

植田 稜己

植松 暖

古川 蒼馬

小谷 朱花里

小田部 麻央

下瀬 結翔

釋迦郡 圭

上圓 幸人

白石 凜華

竹内 瞬

坪井 恋夏

富永 一葉

中西 音葉

中野 航良

縄田 吏咲

松虫がチンチロリンとないている 二宮 和磨

もうすぐだゆきがポツポツふりそうだ 浜村 紅愛

もみじはね赤色がよくにあつてる 広田 蒼真

いちめんがイチョウやもみじきんかくじ 三原 慶悟

ひらひらとまいちるさくらピンク色 矢田貝 美瑚

白い雪下校とちゆうにふつてきた 柳 飛羽

こうようだいろあざやかなさんばみち 山本 稜也

見初小学校 3年

やきいもを家ぞくで食べたあつあつだ 石橋 廉風

もみじの葉赤くて小さいあかちゃんので ヴイラノ ユリア

やきいもをやいてたくさんたべたいな 土本 修也

ハロウィンでおかしもらいによるのまち 平井 勇心

くりの時期たきこみごはんほくほくだ 久松 翔亜

きゆうしよくでほくほくあまいさつまいも 松尾 結空

さつまいもやいて食べたよホカホカだ 宮田 真嘉

夏休みだらだらしたよねてばかり 森田 俊祐

やきいもはほくほくあまいかおりだな 渡邊 皇介

見初小学校 4年

お月見でだんごいっぱい食べたいな 井上 寛太

月見の日空見あげればきれいだな 岩村 彩夢

もうすぐでハロウィンだからたのしみだ 岩本 紗來

クリスマス今年はドッジボールがいい 大山 綾花

クリスマスメガミンクスをたのむんだ 兼島 育生

ハロウィンにおかしたくさんもらいたい 川崎 りりあ

ハロウィンでイタズラするぞふるえちゃう 高野 蒼生

ハロウィンでミニオンかそうたのしいな 中尾 凜花

さんま焼きねこがほしがるあげましょう 中垣 綾乃

クリスマスこんどはちゃんとはどくかな 長谷川 芳胤

紅葉に光る山々見てみたい 藤田 晃輔

きれいな夜月見だんごをたべたいな 藤田 修吾

クリスマスイルミネーションきれいだな 溝部 妃世菜

やすみのひかぞくとプールのすべりだい 森下 結月

さむくなり長そでできるぞきいろだす 山根 さな

秋まつりたいたたたくのたのしみだ 渡邊 太陽

兼 久 ちわき

今年度もたくさんの方々に応募していただき、有意義な俳句大会が開催できましたことを感謝しています。

俳句は作ってなんぼのもの、俳句大会も応募だけでなく、参加して意義のあるものです。その意味では、年々参加者が減少する傾向にあるのが残念でなりません。来年は是非多くの方々に参加していただけるように、私たち選者も頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

今年の大会では、俳句の表記の問題で盛り上がりました。

宇部市長賞の〈靴底に貼りつく地球油照り〉と宇部市教育長賞の〈一面に切って貼り付け新米来〉の使用漢字「貼」についての質問でした。一般的な「張」の漢字とではどう違うのかということでした。

確かに俳句は最短詩型ですので、いろいろと工夫を凝らして表現します。表記もその一つで、ここは漢字にするか、平仮名で書くかなどと悩むところですよ。

一般的には、漢字は重たくなり仮名にすると柔らかで優しい感じがでてきます。但し片仮名は、俳句では外来語のみに使用しますが、それを使うと句が軽くなりますので一つまでにとどめています。

このように、俳句は文字一つにしても心を配って詠みますので、「張」と「貼」では作者の思いが違うのです。「張る」には引つ張ってのばすという意味が、「貼る」にするとべったりと貼り付けるといふ感じが出ます。切手の場合は問題ないでしょうが、市長賞の秀句は、まるで地球が靴底にべったりとくっつくようなと、今年の猛暑を意表を突く比喻で伝えようとしたのです。

以上のように、俳句というものは自分の思い、即ち心_{こころ}を表現する最短の文学ですので、一字一言をおろそ

かにせず、心を込めて、またそれを楽しんで詠んでください。

来年はもっともっとたくさん応募者がありますように心から願っております。

永田 芳子

投句作品のそれぞれから俳句への取り組みの力強さを感じます。そして、それぞれの個性を見る事が出来ると思います。

今年の入賞五句はどれも鑑賞しやすいと思います。生活の中から、また自然との関わりの中から感じた事を切り取って作品にする。誰もが感じる事をもう少し深く切り込んで作品にする事も大切な事と思います。

「大会にご来場いただけない方への選評」

入選句 夕焼や最終バスのドアの音

この最終バスが走る所は、一日に数便しか運行しない所と想像しました。最終の乗客が降りて、ドアの閉まる音が、夕焼の深くなりゆく空に響いて、これから夜の帳りへと向ってゆく。この様に鑑賞出来る佳句と思います。

山笑ふ仏の耳の大きなり

とても楽しい句として鑑賞しました。中七と下五の流れがもつとすつきりすると良いと思います。例えば、

山笑ふ大きな耳の仏様↓(仏たち)

大きい耳を強調したい作者の思いとは少し違うかもしれませんが。

西日差す選挙ポスターみな笑顔

西日が描かれています。立候補者の貼ってあるポスターに堪えがたい暑さとなる西日が当たっている。けれどそのポスターの人々はみな笑顔のままである。おかしみを感じさせる興味深い作品だと思います。

全員の着席待ちぬ夏料理

親しい方々との楽しいひととき。これから運ばれる料理を待つ。夏料理を具体的に例えば鱧料理・鮎料理・鱈料理などとすれば、もつと味わい深い句になるかと思えます。

入賞、入賞に至らなかった句もみな、一生懸命に推敲を重ねられたと思います。どうぞ、来年も力強い作品を楽しみにしております。

西川章夫

大会当日出席されなかった方々の応募作品について、以下に寸評させていただきます。

全員の着席待ちぬ夏料理

椿 壽子

個人的に、私は京都鴨川河畔の料亭で行った同窓会の席を思い出しました。一般的には、法事など、宴会が始まる前に、会場へ早く到着した出席者の待ち遠しい気持ち伝わってきます。

日焼けの子今日はピアノの発表会 上田 久美枝

日焼けの子というのだから、夏休み中のこと。発表会に備えこの子は日々ピアノの稽古に励んできたようです。また、泳ぎに行ったり、蟬取りをしたり、活発で元気な日々の暮らし振りが分かります。

うつすらと葉先に紅の若楓 浜村 洋一

若楓の色と言えば浅緑。既成観念ではそういうことになります。作者は葉先が僅かに赤みを帯びていることを発見しています。物をよく視る作者の姿勢に対し、一定の評価をしたい。ただ、もっと辛抱して視れば、別の発見があったかもしれません。

朝焼けの空に飛び立つ始発電 伊藤 麻衣

夏の早朝、空港近くを散歩しているときの属目句。始発電を見送ると、自分自身も今日は好い一日が送れそうな気がし、清々しい気分になったことでしょう。助詞「に」を「へ」に直すことを提案します。

雨宿りのつもり葉かげの子蠅螂 辻 きみ子

稚けない蠅螂のこどもと対話しているような作者の姿勢にとっても好感をもちました。感動の種は対象との対話の中に宿ります。

熱心な俳句愛好者で会場が満席となり、いい雰囲気の下に進行したのは良かった。スタッフのご尽力の結果であらう。

率直に言って、学生の部の応募者数が少なかったこと、応募作品の質が揮わなかったことが残念であった。来年度の作品募集に当たっては、一層の工夫を要すると思われる。

「自分の俳句を求めて」

堀 節 誉

今年も多くの応募された俳句作品を読ませてもらった。そして納得のいく入賞作品が決まったと思う。選者四人はそれぞれの考えで、特選、入選を選ぶ。その後、集まっているいろいろ議論を重ねる。最後には挙手になることもある。私自身は、技術や俳句のかたちに囚われず、自分の言葉で書かれた新鮮な一句を選びたいと思っている。日常を非日常にとらえ、非日常を日常として詠む。状況の説明でなく、自身の内面が俳句を通して感じられるような一句。選句する側にはそれだけ感性を研ぎ澄まして読む力が要求される。

ここでは、選者としてではなく俳句仲間として、私の考えていることを書いてみたい。

俳句が上手になるには、〈たくさん書いてたくさん捨てる〉（≡多作多捨）と言われてきた。数多くの句を作り、その多くのなかから本当に良いと思えるわずかな一句を選び残すという意味である。また、私自身は次のようにも考えている。一句に対しても、たくさん言葉やイメージがあるのだろうが、それらを削ぎ落としていくことで、内面の世界を言葉と言葉の関係や余白のなかで表せるようになるのではないかと。たくさんさんの言葉を自分のなかに持つこと、自然とそのなかの自分を見つめること、四季を自らの五感で知ること、言葉がもつ語感や肌触りを感じることに。そして、自分の今現在の思いや喜怒哀楽を言葉にしていくことを一切ためらわないこと。このようなことが〈多作多捨〉の本質だと思う。それは、自分独自の「言葉」であり、自分独自の「捨て方」になる。なかなか思うように書けない俳句だが、私自身も応募される皆さんと同じように、常に俳句の力に励まされ、自分の俳句を求めているひとりである。

短 歌

選者自由詠

スーツケースの上にちよこんと座つてる坊やもならんで待つ新幹線

中本 亜矢子

君との末転として一本の棒線を引くあみだくじの上

瀬戸内 光

秋から冬へ冬から秋へ行き来する日々に陽ざしはやわらかくあり

堀 静香

選者課題詠

水非常ときを隔てて見つけたる遺骨は黒き石炭の色

中本 亜矢子

花梅雨に藤の花房濡れ重り常盤神社の鳥居へさし寄す

瀬戸内 光

銀杏並木のグラデーションを見上げつつ図書館までの平らかな道

堀 静香

令和七年度 宇部市芸術祭 短歌部門 入賞作品

「一般自由詠」

宇部市長賞

父母が「見上げてごらん」と歌うから夜空を見仰ぐ癖われにつき

中塚 紀代子

宇部市教育長賞

葉屋のおまけでもらいし紙風船妻に手わたせど手からこぼるる

村上 喜信

宇部市議会議長賞

コンバイン徳佐平野に動く見ゆ山口線は秋を分け入る

前田 澄江

宇部文化連盟賞

盆帰りせがまれ読んだ「白雪姫」眠りつくまで我が腕の中

安井 敬子

宇部日報社賞

秋晴れに土耕せば背伸びする赤子のように芽吹く朝顔

河井 綾乃

入選

早く逝きし娘の詠を編む母よその肩書きに詩人と刻む
みどり児を抱き帰省した姪の娘はハイヒールをやめスニーカーを履く
免許返納われ乗せ呉れし原付が軽トラに乗り門を出てゆく
乗船時没収されしと消し墨でつづりし叔父のシベリアの日記
かんさつ後孫にもらいし種蒔きて九年つづいて藍のあさがお
元気でとつかの間触れし細き指車去り行く春風まといて
あんなにも反発ばかりしてたのにあなたに会いたい母に会いたい

村田 淑子
國安 秀美
黒瀬 悦子
平川 和子
吉富 啓子
中丸 和賀子
磯部 紀子

「一般課題詠」

特別賞

白土の浜に座りてふるさとの海想ふなり独りとなりて

田中正子

「学生自由詠」

優秀賞

虹が出た今日こそくぐるぞ消えるなよペダル踏む足力が入る

伊藤 志玲奈

入選

夏休み宿題やる気になったのにねこの手ちよいちよい遊びにさそう

野海和修

「学生課題詠」

特別賞

常盤湖の波音涼し夏の風頬をくすぐるひととき
の夢

藤本美夢

「一般自由詠」

ひやしぱちとうがんですよおひるです見た目涼しいおかずを食べる

名月照らす縁へと這いし幼児の伸ばす手の影光をつかむ

月の陰クリスマスまで指折りにいざよう私誘うわたし

早く逝きし娘の詠を編む母よその肩書きに詩人と刻む

ゆきぐにの夏は短し浴衣着て電車の中に踊り復習う

合はせたる手のしわ探し夏空に声を重ねて平和を祈る

感涙し競り勝つ瞬間立ち上がれパッツ一丸ぶちアツ響け

五時起きで夏の日課の水やりは暗さで秋の気配感じる

みどり児を抱き帰省した姪の娘はハイヒールをやめスニーカーを履く

免許返納われ乗せ呉れし原付が軽トラに乗り門を出てゆく

コンバイン徳佐平野に動く見ゆ山口線は秋を分け入る

天体ショー今夜は見るぞと思えども気づけば空に赤銅の月

大寒波赤き芽出でし芍薬に雪降り積もるどんどん積もる

乗船時没収されしと消し墨でつづりし叔父のシベリアの日記

大和路を旅して参る神社寺いにしえ人に心をよせて

湧き昇る夏雲の下草刈の傘になれよと眩いてみる

父母と夫の遺影に声かけてひと日始まり先ずは体操

薬屋のおまけでもらいし紙風船妻に手わたせど手からこぼるる

エアコンを効かせた部屋に秋植えのカタログ抜け日がない一日

有久園子

松木宏

伊藤聡

村田淑子

遠藤宣子

厚母至眞子

酒井隆夫

伊藤麻衣

國安秀美

黒瀬悦子

前田澄江

西田えつこ

重村道子

平川和子

大下照美

志賀美知子

田中正子

村上喜信

為近艶子

父母が「見上げてごらん」と歌うから夜空を見仰ぐ癖われにつき

かんさつ後孫にもらしい種蒔きて九年つづいて藍のあさがお

亡母に似て踊の好きな妹の初盆に参る日傘をさして

今しがた来たのは誰ぞお迎えか来る程暇か貧乏人に

盆帰りせがまれ読んだ「白雪姫」眠りつくまで我が腕の中

一望の稲熟れ色にかがやきて稲波はブルーの天と呼応す

元気でとつかの間触れし細き指車去り行く春風まといて

予科練の夫の写真見入り居る戦後八十年夏の日

蝉一匹病窓四階に止まり街路樹に去る励ましかしら？

この国の美しきもの山奥の早苗の植わる小さな水張り田

あんなにも反発ばかりしてたのにあなたに会いたい母に会いたい

秋晴れに土耕せば背伸びする赤子のように芽吹く朝顔

花壇植え春から夏へ美しくそして秋から冬へと続く

「一般課題詠」

きわの海2本のピーヤおがんでるテレビのがめんみつめています

名月の夜はロンドのメロデーにうさぎも踊る宇部の街角

底力街を培い今が在り海に聳える英雄のごと

薄いの透明なのにその壁はひずみを孕み歪みを映す

中塚 紀代子

吉富 啓子

藤井 伊佐子

藤田 甲二

安井 敬子

藤井 重行

中丸 和賀子

石田 勝子

田中 和子

三浦 洋

磯部 紀子

河井 綾乃

磯部 光隆

有久 園子

松木 宏

伊藤 聡

村田 淑子

コメツキガニ右に左に孫誘う一年ぶりの岐波の夏空

朝靄に墨絵のごとく広がる工場の連なり二筋の煙

秋空にスツクと立てり「蟻の城」空の青さと常盤湖に映え

満席の響きの波が時刻み市民の熱気涙で満ちる

本物の飛行機よりも人気者飛ぶ日夢見て子供見守る

御撫育の水滔々と流れゆく厚東の郷へ実りの秋来ぬ

薔薇園の宇部空港を機は発てり互の万感雲に消え入る

ときわ湖の檜と石炭記念館いま在と昔を語りしシンボル

音響の良さは有名市民館渡辺翁の文化の遺産

山田畑宇部へと続く国道の高架くぐれば街は見へたり

朝散歩護国神社の境内に夜明けの太鼓リズムをきざむ

白土の浜に座りてふるさとの海想ふなり独りとなりて

図書館の冬の子供はこの夏もミトンの手袋つけおり妻も

京に来て村野藤吾氏墓前にて緩きカーブの社屋を憶ふ

肩寄せて未来を誓った常盤湖に入道雲わくひとりの晩夏

神輿割る故事のこの地に生れ育ち腰割字の習はしを享く

始めなる訪いし恩田のスタジアム若きの歓声めぐりの若葉

入院しドクターへりの離着陸初めて目にし大きく手を振る

厚東川河口に横たふ巨大橋小つちな人がよくぞ架けたる

三千の風鈴揺れる琴崎宮平和の短冊届け鎮守へ

平山 悟

遠藤 宣子

厚母 至眞子

酒井 隆夫

伊藤 麻衣

黒瀬 悦子

前田 澄江

西田 えつこ

重村 道子

平川 和子

大下 照美

田中 正子

村上 喜信

為近 艶子

安井 敬子

藤井 重行

石田 勝子

田中 和子

三浦 洋子

岡村 陽子

海底で濡れる涙に伸ばす手で国境をなぞる彫刻のまち
四季の薔薇宇部空港で咲いている色とりどりの香りと共に

河井綾乃
磯部光隆

「学生自由詠」

虹が出た今日こそくぐるぞ消えるなよベダル踏む足力が入る
夏休み宿題やる気になったのにねこの手ちよいちよい遊びにさそう
あじさいの大きな葉っぱに雨粒がひとつふたつと　ながれさえゆく
わが友の新たな地への旅立ちに笑顔見せつつひかり一粒
玄関に靴があふれて声交わす盆の集いに満面の笑み

伊藤志玲奈
野海和修
土山葵
片岡小椋
藤本美夢

「学生課題詠」

ヤシの木のベンチに座りお見送り機長も手を振りテンション上がる
宇部の地にしばられつづけるピラミッド思い出すのはエジプトの空
十五夜に家族みんなで訪れたドーム広がる満天の星
常盤湖の波音涼し夏の風頬をくすぐるひとときの夢
旅行中白が目立つ道路際思いだすのはみかん色のガードレール
海に映え山の街並み染まりゆく宇部の街には風やわらかし

伊藤志玲奈
野海和修
片岡小椋
藤本美夢
西村小春
大野彩夏

短歌部門総評（一般の部）

瀬戸内 光

今年度の宇部市芸術祭短歌部門では、日常の機微を描いた作品また作者が積み重ねてきた経験が感じられる心に響くすばらしい詠草が集まりました。また宇部市への思いが丁寧に織り込まれた課題詠部門には具象性の確かな手ごたえを感じさせ、共感を持って読むことができました。心ひかれた歌はたくさんありますが、一般の自由詠の部の市長賞を受賞された

父母が「見上げてごらん」と歌うから夜空を見仰ぐ癖われにつき

「見上げてごらん夜の星を」は、1963年坂本九のカバーのヒット曲です。お父様もお母様も歌っていたというフレーズより暖かな仲の良い家庭が浮かびました。俯くより空を見上げ歩んでいく人生は素晴らしいです。また平明な言葉で詠いあげたことで、読者に景を顕たせました。

一般課題詠の部の特別賞の

白土の浜に座りてふるさとの海想ふなり独りとなりて

この歌の眼目は結句。そして一つの絵画もしくは映画のワンシーンのような一首です。白土の浜という固有名詞も歌意と合っています。

短歌は千三百年と長い歴史を持ちます。だから作歌において、既視感の在る表現やAIの予測可能な表現ではつまりません。これからも具体的な場面を自分だけの言葉で捕らえるために、常に自分の視線を明確にして共に作歌を続けて行くようではありませんか。

短歌部門総評（学生の部）

堀 静 香

今回が初めての選考でしたが、改めてご応募いただいた学生のみなさん、ありがとうございます。今回の応募数を見ても、なかなか学生のうちから短歌を実作しよう、それを応募してみようと思うことは忙しい生活なかでは難しいかもしれません。けれど、「いま」だから考えること、感じることもあるはずで（それは年齢にかかわらず、とも言えますが）そういう「いま」の「わたし」の「実感」というものを手放さないために、短歌という詩形は言ってしまうは手っ取り早い、手軽な表現のひとつだと思います。音数が決まっているし、俳句と違って季語も要りません。大それたことではなく、ふと自分のなかだけでつぶやいたような、必ず忘れてしまうようないつときを、そのとき見ていた季節の情景とともに言葉にするだけで、それを（なんとか初めは無理やりにも）31音に乗せるだけで、それは立派な「短歌」になるのです。私が短歌に出会ったのは20代になってからですが、もしも高校生、いや中学生、いやいや小学生の頃に短歌を一首でも作っていたら、などとたまに思います。来年もぜひ、あなたの「いま」を歌にしてどんどんご応募ください。力作をお待ちしています。

詩



詩作品オーディエンス賞について

本誌に掲載された詩作品の中から、読者の皆さまの投票によって「オーディエンス賞」を選出します。オーディエンス賞は、皆さまの感じた想いを形にする賞です。どうぞ、皆さまの心に響いた作品に、投票をお願いします。

投票方法 各作品右上の番号を、下記QRコード上のGoogleフォームにて選択しご投票ください。

※お一人様一票まで

投票期限 2026年2月28日（土）



1 うべの子

三
明
十
種

常盤のみずうみの上で

私の頭を

強く振れば

石炭ガラが

こぼれてしまふ

それはそのままごつそりと

光化学の風に浚われて

小学校の上を、

銀天街の上を、

市役所の上を、

真締川の上を、

霜降山の上を、

面映ゆさうに移動してゆくのです。

移動してゆくのは

それだけではなく

煤塵で黒ほけた顔が

帰還兵だった先生、

嘘つきだった友達、

好きだった女の子、

気難しかった叔母、

短気者だった父親、

みんなみいんな

近付いてきては、はなれて、

はなれては、近付いて、を、

日が暮れてゆく迄の間、

繰り返してはおるのです。

滑走路のかたわらに

随分と居座っていた鍋島は

とうの昔にけずれて失くなり

私の頭の中の

石炭ガラも

こぼれ尽きてしまつたやうです。

そうです、それでも、

私は、うべの子。

2 園子さん

有久園子

外来のちりょうしつさんで

「園子さん」と

呼んで下さる

かんごしさん

外来のちりょうしつさんでは

わたし

アイドルなんですよ

癌のステージ4――

抗癌剤の点てき

ふくさようあり

けっかんつうもあり

点てきのはりを左うでに

さしながら

やわらかいばんを

たべている。

びょういんのばいてんで

やわらかいばんを2つと

おくすりをのむための

ペットボトルのおちやを
かうの

おひるごはんのかわりなの
抗癌ざいのふくさようで

ゆびのうごきがわるくなつたので
かんごしさんに

ペットボトルのふたを

あけてもらうの

ちりょうしつでは

けっかんつうがあつても

わたしにとってはごくらくなの

わたしにとってはごくらくなの

わたしにとってはてんごくなのよ

そのりゆうは

言えないけれど

それが

言えたら楽だけど

言えないの

ばんが大すき

けつえきけんさのけつか

抗癩ぎいの点てきが
中止になったことがあるの
きゅうしよくは
欠しよくとどけ
わたしのつごうで
きゅうしよくは
おかゆにしてみらっているの
麦ごはんがたべたい
ぱりぱりとした
ふつうのごはんが
たべたい
みかくはかい
しよくばん
トーストが
たべたい
きゅうしよくに
トーストが
でたことがない
めだまやきがたべたい
きゅうしよくに

めだまやきが

でたことがない

むぎちゃがのめなくなつた

なつとうがたべられなくなつた

きれいなこえがでなくなつた

これも抗瘤ざいのふくさよう

わたしのほかにも

そういうひとがいるからネ

それでも

抗瘤ざいの点てきを

つつけるよ

つつけるよ

抗瘤ざいの

点てきを

やめるといふ

きもちはないのよ

「園子さん」

とよんで下さる

かんごしさん

その明るいこえに

すくわれている
なってみてわかる
こじんさのある
抗癌ざいの
ふくさよう
それでも
つづけます
それでもつづけます
今では
それが
いきがいですよ
いきがいですよ
きゆうしよくの
主食がへりました
それで
わたしのおかゆもへりました
点てきをうけながら
かみの毛を
なくした
わたしが

やわらかいばんを
たべている
たべている

3

ベネツィアの微笑み

藤井 貴宏

川のささやきが母の微笑みに聴こえる

夜風打たれて私にそっと寄り添ってくれた君だもの

心のトキメキ溢れ出す

子どもの頃、理科室のカーテンは揺れていた

フラスコに注がれるかのように君への愛は沢山の笑顔でいっぱい

諦めない強さ、貴女のくれた強さ・・・

今、私には解るような気がするよ

大きな夢が希望となりて燥ぎ出す

一歩一歩貴女が居てくれた時は流れ出すけど、私と居た時間は止まったままなんだ

今君に向けてピュアな気持ちで伝えたい

本当に有難う

声にはならないけれど。

そう瞼を閉じた

4 螢

藤井貴宏

魂が叫ぶ 水よ、雨よ、注げと叫ぶ

太平洋の真ん中に二つ折りにした、亡き少女の手紙に綴る

母さん。もう一度呼んでよ・・・伝えたい思いがここにある

核やミサイルは終いなさい、母の胸が高まる。

もう逃げ惑う人は見たくないのだと、鐘がキーンコーンと鳴って

灯が担う足跡を、鎖を、爆弾を、何より、あの日の母の笑顔を

取り戻したいけん 風はうねる 今時を封じ込みたまえ

そつと私は詠う

5

かくれんぼ

松木 宏

時代が移り変わろうと

いつもどこかでリストラは続いている

今日も誰かのすすり泣く声が聞こえる

凧が追い立てるように吹いている

もーいーかい

ほとくの仕事は営業職

成績も上がらず融通も効かない

いつも課長に怒鳴られっぱなし

今日もぼくは外勤

まーただだよ

家を一軒一軒回っている

なかなか結果に結びつかない

いつもどこかでつまずいてしまう

疲れ果てた時は公園のベンチに坐り

目を閉じて風の声を聞いている

心が震え自然と涙がこぼれ出す

夜寝ていても課長の怒鳴り声が

聞こえたりして眠れない

それでもぼくは自分を励まし

頑張つて外回りを続ける

まーただかい

心身ともに疲労困憊したぼくは

仕事もせずに隠れ場所を探す

外回りに出かけ

何をするともなく

公園のベンチで一日ぼーっとしている

もーいーよ

心がからつぽのまま会社へ戻る

ついにぼくは課長に肩を叩かれ

クビを宣告された

やはり会社は人情の無い鬼だった

でもこれでかくれんぼも終わりだ

辛かったけど心も躰も何故かほっとした

会社を出ると外では雪がチラリホラリ

ぼくの心の中に降っていく

生活の糧を失くしたぼくは

いつまでもブラブラばかりしてはられない

今度はぼくが鬼

再就職へ向かって追いかける

人手不足という御時世とは言え

なかなか希望する仕事は見つからない

すれ違う人たちは何の悩みもなく

幸せそうに見える

就職活動は大変だけど

今までと違った生活ができると思うと

ある意味では些細な幸せかも知れない

でも戦争をしている国々での人生を思うと
ぼくの就職活動なんか
贅沢な苦勞なのだ

雪がぼくの顔を叩く
ぼくは鬼の形相で
就職活動に明け暮れる
白い吐息に春の訪れを願って

もーいーかい まーだだよ

6

時間をかける — 我が人生 —

古屋 洋子

もしも 時間をかけることが
できたなら

四十年 昔に

かえりたい

今は 家族もいないけど

四十年 昔には

母がいた 弟がいた

そして 一匹の猫 マルがいた

もしも 時間をかけることが

できたなら

女学生に かえりたい

そこで 私は 何をしよう

家政科だったから

かわいい ぬいぐるみ

つくりたい

フランス ししゅうも

いいかも しれない

そして ダブルベッドの

カバーが 作りたい

あのころ 何をしてたっけ

運動会の

かんばん 描いたっけ

当時はやりの

赤い オオカミ

赤い テンガロハット

赤い パンタロンスーツ

四枚のかんばんで

一番 はでだった

もしも 時間をかけることが

できたなら

五十年 昔に かけていたい

そこで 私は

漫画を 描くの

少女コミック 描くの

槇村さとるさんのように

ヘタツピな 私が

漫画を 描くの

でも 未来は

行きたくない

悲しいこと ばかり

一人ぼっちの 私

私を向かえてくれる

娘もいない

ただ 一人ぼっちの私

未来は 悲しすぎて

涙も 出ない

そんな気がする

そんな気が

するだけ？

いいえ それが

真実だから

幸福な時は ここにあり

未来には ない

私の 未来の

時間をかけることが できるなら

少しこわいけど

年老いて ベッドの上の

私を 見たい

しわくちや顔で

何も 話せない

耳も きつと

きこえない

そんな私

もう 遠い 景色じゃない

もう すぐ そこに

やってくる

私の未来

もう 何年 生きられる

五年生きようか

十年 生きようか

そうして 私は 死んでいく

一人ぼっちで・・・

7

放射冷却

伊藤 聡

十分に暖められていたのに

冷たい表情に目を醒まされる

不一致のスイッチを押してしまつたら

体温はバラバラに吸い込まれる

夜に放り出されるだけ

なくともいらぬ時間が流れ落ちて・・・

8 走れシャローム

大工原 佐知子

走れシャローム 愛馬よ
大地を蹴り

一緒に空までひとつとび

たてがみ なびかせ

雲の上をどこまでも

この躍動感

たまらないよ

誰も追いつけない

じゃまできない

約束も

待ってる人も

すべて忘れて

駆け抜ける

いまこの時

もう少し走らせて

9

願う

成瀬孝幸

星よ 人間の欲望は宇宙のようです

人間は危険な生物ですか

人間は愚かな生物ですか

人間は弱い生物ですか

星よ 巨大隕石で人類は亡ぶのですか

ウイルス菌で人類は亡ぶのですか

核戦争で人類は亡ぶのですか

地球温暖化で人類は亡ぶのですか

星よ 人間は実に弱い生物です

人間はどうしようもない愚かな生物です

人間が一番危険な生物です

星よ 僕たち人類は今何を思うべきですか

僕たちは今何を願うべきですか

僕は今何を行うべきですか

10 白と黒の細長い種

井上順子

いつ頃からか

こぼれ種からなかなか生えてこない
この花で

家の回りを彩りたいと

わらくずのような2センチ弱の種を
何度か土にまいたがうまく発芽しない

今年こそはと昨年の秋にとっておいた種を
あちこちの地面に

重なる程にたくさんまいたら

固まりになっていくつも芽を出した

細い茎が5、6センチになると

密集した苗からそつと一本ずつ抜き

間隔をあけて植え直す

夏の強い日差しに葉はくたつと萎れ
時に激しい降雨に茎は倒れる

しかし根っこをふんばり
茎の横から白い小さな根を出し
生きのびている

9月半ば

膝たけに伸びた茎は

手の平程の葉を左右に広げ

黄色やオレンジの花を咲かせ始めた

糸のようなあの種の

どこにこんな力が入っていたのだろう

一つ二つと丸い花が開くと

そこら中に

電燈が灯ったような明るさが広がる

メキシコでは

日本のお盆にあたるししやの日に

マリーゴールドをたくさん飾るといふ

黄色やオレンジの花が5つも6つも開花し

虫を寄せ付けない香りを

あたり一面に放つ時がくる

11

我が人生

藤田甲二

端的に言つて我が人生は俗に言う
何らの価値も無かつたかなと
思う次第である。

幼少より中学校迄はそれ成りに
期待され実績も上げて来た。
無論そこには地主で村長であつた
祖父父の厳然たる慈愛の心が地区の
方々に有つたのは確かである。

しかし私は二男として生を受け
十五歳よりある事象が許せず
実家を離れた。
お袋には申し分け無かつたと
今でも記憶している。
その人も長く寝た切りとなり
生涯を終えた。

二男の立場で有りながら両親
兄及び姉の葬儀も執り行い
土地に帰した。

でも私には誰も見送る人は無いで
あろう。

我が子二人及び初孫も実家を
継が無いと成った。

私の代で神社及び部落の人々が
眠る墓をそれなりに始末をして
置かねば残された私のせめてもの
生きていた証となればと思う
次第である。

運命に逆つて生きても逆らわなくても
結局は運命さだめなのだと思う。

「方丈記」

ゆく川の流れば絶えずして

然ももとの水にあらず

淀みに浮かぶうたかたは

かつ消えかつ結びて久しく

止どまりたる例し無し

人の世と佳家と又かくのごとし

・
・
・

鴨長明

12

小枝こえだの先の丸い滴しずく

大
亀
恆
芳

水のしたたりを滴という

自分の中で

したたりをくりかえすとき

先が見えなくなり

立ち止まる

立ち止まりをくりかえし

自分を見失う

そのとき

何を求めているのか

自分にくりかえしくりかえし

たずねてみる

小枝の先の丸い滴に

これから

どこへ行くのかたずねた

滴は

何も答えない

小枝から落ちた滴は

しずかに地面に吸い込まれ

何事もなかったように消える

消えた滴は

どこへ行ったのか

たずねようもない

新しい滴となって

小枝に

また

かえってくるのだろうか

閏うるう嬉うれしく 麗うるわしく一年が1日長い閏年うるうねん

太陽暦と ユリウス暦と

ヒジュラ暦が教えてくれた

大切なもう1日を何に使おう

閏うるう憂うれいて 羨うらやんで

4年に一度のオリンピック

4年に一度のワールドカップ

アスリートたちが希望と鍛錬で

掴み取るオリンピックの世界

彼らは知っている

4年後は肉体が大きく変わること

同じ時はめぐって来ないことを

閨うらう

潤うるおい 虚うつろいで

古代ローマ

学者たちが定めた閨年うらう

数学者たちが英智の極みで

掬い取る4年に一度のフィールズ賞

彼らは知っている

4年後は知能が大きく変わること

同じ時はめぐって来ないことを

暖かな教室 教壇の踊り場

先生は個人ノートを手に取り

満面の笑顔で児童に話しかける

「まあっ！

2月29日が誕生日だなんて、素敵ね」

児童は瞳を輝かせ

喜びの表情で先生を見つめる

4年に一度の誕生日

誰よりも嬉しい誕生日

大切なこの1日を何に使おう

AIさえ追いつけない天道の運命を

閏月うるすげにあずけ

冷たい夜空に見あげる星たちは

プールいっぱいの砂ほどにあるというのに

太陽系の生命が

この惑星にしかない切なさを胸に秘め

街の風にあたるから 少しオシャレして
大型店にある陳列棚のジャングルに分け入る

宝ものは成長中のあなたにとって

手の届かない高さにあるかもしれない
でもあなたはその一点を見つめ

エイヤツと手を延ばすだろう

はじめて出会ったその本に

そのCD（音楽）に そのPV（映像）に
あなたを揺さぶり

心落ち着かず宝がつまっている

宝ものを手にとったあなたは

ひろがる世界に望みをたくす
囲われの少年少女は解き放たれ

彼は彼女と出会い 彼女は彼と出会い

世界の不協和音へ核心を放つ

心あるアーティストは

いつだってあなたの味方

あなたに届けたい想いを

キャッチしてくれることに

全身全霊を捧げる

アンドロイドは運命の終末に涙し

幽界はあたたかい人とのつながりを断ち切り

パラレルワールドは

人知をこえた現実をくりひろげ

タイムトラベルは自分の存在さえおびやかす

恋愛の怖さと愚かさに翻弄され

ストーリーが脳内覚醒を起こすほど

彼女は愛くるしく 彼は優しくたくましく

成長していく

宝ものを手にしたあなたは

ときには歌い ときには踊り

ときには想像の翼をひろげ

現実の生きづらさに向かっていく

ことばを胸にきざみ いつだって

はじめから希望は湧いてくる

レジに並ぶ大人たちに覆われながら

宝ものと小さな財布を抱える

あなたの姿から希望が見えてくる

爽やかな風が曇天をおし

森の一角から光が差ししてくるように

15

春 別れ 出会い

山口 仁史

春に別れがあるように

春に出会いがあるように

菜種梅雨が蓮池を

しつとり揺らす

冷たいままの春がつづけば

暖かな日差しの中の彩な花を

観たくなる

催花雨はあけぼのを閉ざし

年度の始末に挟まって

春に嵐が来るように

朦朧となる意識

衣替えに寝具の調整

汗ばみながら合わせながら

日々の仕事がかさむよう

迷い彷徨い春が来る

朝には青空ひろがって

昼には雨雲おしよせて

気がつくと

舞う霰あられ

押し寄せる霰みぞれ

当たるも八卦の空もよう

昏睡の中で家族のざわめきが聞こえる

それぞれに旅立っていった

あの子たちの残影

頬につたう涙で目覚める意識

騙し騙され春が来る

紅い牡丹 白いマーガレット 蒼いアイリス

春の吊いを呼び覚ますよう

春の息吹を感じるよう

お彼岸の道ゆき

ハイウェイの先に映る琥珀の海

なぎのよそおい何処かに隠れ

荒波蹴って押し寄せて

ラジオから届く遙かな沖の海難事故

春の門出を繰り返し

思い違いを論しながら

あの子もひとつ歳をとる

16

なかよし

村田淑子

信号が黄色に変わった

前の車二台は

そのまま走り抜けた

歩道橋の下に

女の子がふたり

手を振っている

「さようならあ」

ここで別れるのね

「さようならあ」

あつ振り向いた

「さようならあ」

また振り向いた

「さようならあ」

一年生かな

ランドセルが光ってる

「さようならあ」

何だか楽しくなってきた

「さようならあ」

でも、あまり進んでない

「さようならあ」

三歩目で振り向いた

「さようならあ」

もうひとり歩道橋へ

階段を駆け上がっていく

「さようならあ」

途中で止まった

「さようならあ」

やっぱりね

「さようならあ」

お家が隣りならよかったね

「さようならあ」

なかなかお家に着かないね

「さようならあ」

お家でママが待っていますよ

信号が青になった

「さようならあ」

いけない、発進しなきゃ

「さようならあ」

でも

ずっと見ていたかったな
あのこたち

さようなら

あなたが「中也」を入れるなら
わたしは「みすゞ」にしときます

君が「みすゞ」にするのなら

僕は「賢治」に替えようか

お互い考えあるらしい

何やらこだわりあるらしい

二人は思案を巡らせて

二冊入れるは止めにして

結局「谷川俊太郎」

自分さがしの旅の友

緑いっばいのガーデンカフェ

素敵な老カップル

片方が 相手の空のカップに紅茶を注ぐ

片方が 相手の手にした本 終えるまで静かに待つ

白い雲が流れる青い空に 緑がはじけて

まるでイギリス映画のワンシーン

一緒にいた友がささやく

「私もあんな素敵なカップルになりたい」

わたしの心のスイッチがカチッと音をたてた

けれどわたしは いつものようにほほ笑んだ

何故 片方は相手の空になったカップを気にして

何故 片方は相手が本を終えるのを静かに待つ

片方が女性で 相手が男性だからか

ほほ笑みはイギリス映画のエンドロールに溶けていく

去ってゆく素敵な老カップル

どんな歴史を刻んであの静けさを得たのだろう

唐突に友がつぶやく

「先日、おばあさんが乗った車椅子を

おじいさんが押しているのを見て

涙がでたの。逆は平気なのにね」

友にもある心のスイッチ

それぞれ位置や硬さが違っても

響く音は同じ

女は死ぬまで台所を這いずり回って

空になったカップを探し、満たしていく

私は終わらない

自分のスイッチ

押し続ける勇気を

19

誰もいない公園

坂野 多鶴子

八月の午後二時

息するのもつらい暑さ

ある催しを見に来たのだが
すでに日にちが過ぎていた

何度も来ている公園なのに

初めて人の姿がない

誰もいない

近くの松林でなくセミの声がにぎやか

緑の芝生に立ち湖面を見下すと

鏡のようにのったりして風もない

なんだか嬉しくなった

私 一人の公園

誰かに

見下されている気配に

見上げれば

白い巨大な犬

逢いにきたのか
待っていた

と 言うのだ

私は日傘をぐるりと回して
犬のまわりを二周歩いた

青い空に入道雲

緑の芝生

白い犬

私の独り占め

20

祖母の家

磯部紀子

大好きな大谷山荘

ゆく道の途中に

母の実家がみえる

祖母の家がみえる

魚追いかけ遊んだ川

祖母が押してくれる

一輪車に乗りこんで

向かった田んぼ

初めてひとりで泊まった日

母が恋しくて泣いた

祖母に抱かれて夜空を

見上げたあの場所

家の裏にある大きな

一本の栗の木

長ぐつをはいて

鍋をかぶれば準備完了

物干しざおで栗を落とす

武装していない祖母

離れた場所で見守る

重装備した私

この坂を通る時には

スピードを落として

昔話を聞いてくれる

ハンドル握る夫

宿でゆっくり

過ごす時間

幸せな時間

大好きな大谷山荘

帰る道の途中に

母の実家がみえる

祖母の家がある

～ある神父様の思い出～

厚母 至真子

「何でも食べてください」

「冷蔵庫も自由に開けてください」

そう言われて開けてみると

冷蔵庫も冷凍庫もほとんど空っぽ
でも

神父様にとっては

ごちそうの詰まった宝庫

ラップに包んだ数個のご飯も

切りかけの小さなハムたちも

一人暮らしの津和野では

大きなごちそう

テーブルの上には林檎1個と

インスタントコーヒーの瓶ひとつ

アメリカから戦後の日本へ

帰化して半世紀以上

ご自分のことにはお金を使わず

余ったお金は修道会へ送金

仲間のため、困った人のために

役に立ててくれると信じて

古びて欠けそうな眼鏡の奥から

青みがかった大きな目

優しいまなざし

袖口の朽ちかけた服を着て

新しく戴いた殆どのものは

誰かにプレゼントしていた

唯一の楽しみは畑を耕すこと

そんなお方に教えられた日々

「荷物をたくさん持つと疲れます」

「愛は与えるほど増えていきます」

宇部を出発して車で2時間

津和野の空は曇っていたけれど

帰途には晴れ間が見えていた

22

ヒロシマへ

厚母 至真子

2025年8月初旬

日帰りバスで広島へ

平和を願う言葉が次々に続く

1人目、2人目

分らない言葉だ

3カ国語目に日本語が聞こえた

一瞬にして霧が晴れた

よく分る

言葉が通じないことは苛立たしい

旧約聖書にもあったではないか

バベルの塔のお話

言葉が通じなくて混乱した人々

言葉の持つ役割

通じないかなしみ

英語、韓国語、そして日本語

せめてトリリンガルであつたら

今日の話は

心にもっと響いただろう

ノーマア ヒロシマ

平和をと願う心は同じでも

それぞれの形は違う

そんなヒロシマに集まった人々

アメリカからも大勢の人々

世界のどこかでは今も戦争中

この日本では

戦後生まれが次々に80歳を迎える

『団塊の世代』と呼ばれる我等にも

この世での『定命』は近づいている

生き方を問われ続ける世代だ

23

髪の色

厚母 至真子

何故人は髪を染めるのか

染めないつもりだったのに

「仕事をするなら黒髪云々」

先輩のひと言が効いた

黒くした日から30年

70代半ば

現在無職なり

染めると痒い

黒髪もここまでだ

頭頂から白くなり

忍耐の6ヶ月

美容院で黒い部分をカット

母そっくりな顔が現れた

グレイヘアの80代が問うた

「何歳？ 同い年？」

いやいや、それはないでしょう

あなたは5歳も年上

とは言えず

会話に微妙な

（間）

相手より若いと思っっている2人

髪の色だけでは決められないのだ

気持ちが大事だ

バシッ

自分の背中を叩いてみる

まだまだ背中まで手を届く

老け込むな

黒髪の魔法に負けるな

見かけに振り回されるな